日蓮大聖人御書全集

妙法比丘尼御返事（みょうほうびくにごへんじ）

新版2104～2121

妙法比丘尼御返事

弘安元年('78) 9月6日　57歳　妙法尼

御文に云わく「たふかたびら一つ、あによめにて候

女房のつたう」と云々。また「おわりの次郎兵衛殿、六月

二十二日に死なせ給う」と云々。

付法蔵経と申す経は、仏、我が滅後に我が法を弘むべ

きようを説かせ給いて候。その中に「我が滅後正法

一千年が間、次第に使いをつかわすべし。第一は迦葉尊者

二十年、第二は阿難尊者二十年、第三は商那和修二十年、

乃至第二十三は師子尊者なり」と云々。

その第三の商那和修と申す人の御事を仏の説かせ給いて候ようは、商那和修と申すは衣の名なり。この人、生まれし時、衣をきて生まれて候いき。不思議なりしことなり。六道の中に、地獄道より人道に至るまでは、いかなる人も始めはあかはだかにて候に、天道こそ衣をきて生まれ候え。たといいかなる賢人・聖人も、人に生まるるならいは皆あかはだかなり。一生補処の菩薩すら、なおはだかにて生まれ給えり。いかにいわんや、その外をや。

しかるにこの人は、商那衣と申すいみじき衣にまとわれて生まれさせ給いしが、この衣は血もつかず、けがることもなし。譬えば、池に蓮のおい、おしの羽の水にぬれざるがごとし。この人、次第に生長ありしかば、またこの衣次第に広く長くなる。冬はあつく、夏はうすく、春は青く、秋は白くなり候いしほどに、長者にておわせしかば、何事もともしからず。後には仏の記しおき給いしことたがうことなし。故に、阿難尊者の御弟子とならせ給いて御出家ありしかば、この衣変じて五条・七条・九条等の御袈裟と

なり候いき。

かかる不思議の候いし故を仏の説かせ給いしようは、乃往過去阿僧祇劫の当初、この人は商人にてありしが、五百人の商人とともに大海に船を浮かべてあきないをせしほどに、海辺に重病の者あり。しかれども、辟支仏と申して貴人なり。先業にてやありけん、病にかかりて、身やつれ心おぼれ、不浄にまとわれておわせしを、この商人あわれみ奉って、ねんごろに看病して生かしまいらせ、不浄をすすぎすてて、麤布の商那衣をきせまいらせてありしか

ば、この聖人悦んで願じて云わく「汝、我を助けて身の恥を隠せり。この衣を今生・後生の衣とせん」とて、やがて涅槃に入り給いき。この功徳によりて、過去無量劫の間、人中・天上に生まれ、生まるる度ごとに、この衣身に随って離るることなし。乃至、今生に釈迦如来の滅後、第三の付嘱をうけて商那和修と申す聖人となり、摩突羅国の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化して、仏法を弘通し給いしこと二十年なり。詮ずるところ、商那和修比丘の一切のたのしみ・不思議は皆、彼の衣より

出生せりとこそ説かれて候え。

しかるに、日蓮は南閻浮提日本国と申す国の者なり。この国は、仏の世に出でさせ給いし国よりは東に当たって二十万余里の外、遥かなる海中の小島なり。しかるに、仏御入滅ありては既に二千二百二十七年なり。月氏・漢土の人のこの国の人々を見候えば、この国の人の伊豆の大島、奥州の東のえぞなんどを見るようにこそ候らめ。

しかるに、日蓮は日本国安房国と申す国に生まれて候いしが、民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり。「この度、

いかにもして仏種をもうえ生死を離るる身とならん」と思って候いしほどに、皆人の願わせ給うことなれば、阿弥陀仏をたのみ奉り、幼少より名号を唱え候いしほどに、いささかのことありて、このことを疑いし故に、一つの願をおこす。

「日本国に渡れるところの仏経ならびに菩薩の論と人師の釈を習い見候わばや。また倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗・華厳宗・真言宗・法華天台宗と申す宗どもあまた有りときく上に、禅宗・浄土宗と申す宗も

候なり。これらの宗々、枝葉をばこまかに習わずとも、所詮・肝要を知る身とならばや」と思いし故に、随分にはしりまわり、十二・十六の年より三十二に至るまで、二十余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々あらあら習い回り候いしほどに、一つの不思議あり。

我らがはかなき心に推するに、「仏法はただ一味なるべし。いずれもいずれも、心に入れて習い願わば、生死を離るべし」とこそ思って候に、仏法の中に入って悪しく習い候いぬれば、謗法と申す大いなる穴に堕ち入って、十悪

五逆と申して日々夜々に殺生・偸盗・邪婬・妄語等をおかす人よりも、五逆罪と申して父母等を殺す悪人よりも、比丘・比丘尼となりて身には二百五十戒をかたく持ち、心には八万法蔵をうかべて候ようなる智者・聖人の、一生が間に一悪をもつくらず、人には仏のようにおもわれ、我が身もまたさながらに悪道にはよも堕ちじと思うほどに、十悪五逆の罪人よりもつよく地獄に堕ちて、阿鼻大城を栖として永く地獄をいでぬことの候いけるぞ。

譬えば、人ありて、世にあらんがために国主につかえ奉

るほどに、させるあやまちはなけれども、我が心のたらぬ上、身にあやしきふるまいかさなるを、なお我が身にも失ありともしらず、また傍輩も不思議ともおもわざるに、后等の御事によりてあやまつことはなけれども自然にふるまいあしく、王なんどに不思議に見えまいらせぬれば、謀反の者よりもその失重し。この身とがにかかりぬれば、父母・兄弟・所従なんどもまたかるからざる失におこなわることあり。

謗法と申す罪をば、我もしらず、人も失とも思わず、た

だ「仏法をならえば貴し」とのみ思って候ほどに、この人も、またこの人にしたがう弟子檀那等も、無間地獄に堕つることあり。いわゆる、勝意比丘・苦岸比丘なんど申せし僧は、二百五十戒をかたく持ち、三千の威儀を一つもかけずありし人なれども、無間大城に堕ちて出ずる期見えず。また彼の比丘に近づきて弟子となり檀那となる人々、存の外に大地微塵の数よりも多く地獄に堕ちて、師とともに苦を受けしぞかし。この人、後世のために衆善を修せしより外はまた心なかりしかども、かかる不祥にあいて候いしぞか

し。

かかることを見候いしゆえに、あらあら経論を勘え候えば、日本国の当世こそ、それに似て候え。代末になり候えば、世間のまつりごとのあらきにつけても世の中あやうかるべき上、この日本国は他国にもにず仏法弘まりて国おさまるべきかと思って候えば、中々、仏法弘まりて世もいたく衰え人も多く悪道に堕つべしと見えて候。

その故は、日本国は月氏・漢土よりも堂塔等の多き中に、大体は阿弥陀堂なり。その上、家ごとに阿弥陀仏を木像に造

り画像に書き、人ごとに六万・八万等の念仏を申す。また他方を抛って西方を願う。愚者の眼にも貴しと見え候上、一切の智人も皆いみじきことなりとほめさせ給う。

また人王五十代桓武天皇の御宇に、弘法大師と申す聖人この国に生まれて、漢土より真言宗と申すめずらしき法を習い伝え、平城・嵯峨・淳和等の王の御師となりて、東寺・高野と申す寺を建立し、また慈覚大師・智証大師と申す聖人、同じくこの宗を習い伝えて、叡山・園城寺に弘通せしかば、日本国の山寺一同にこの法を伝え、今に真言を行

い鈴をふりて公家・武家の御祈りをし候。いわゆる二階堂・大御堂・若宮等の別当等これなり。これは古も御たのみある上、当世の国主等、家には柱、天には日月、河には橋、海には船のごとく御たのみあり。

禅宗と申すは、また当世の持斎等を建長寺等にあがめさせ給いて、父母よりも重んじ、神よりも御たのみあり。されば、一切の諸人、頭をかたぶけ、手をあざう。

かかる世に、いかなればにや候らん、天変と申して彗星長く東西に渡り、地夭と申して大地をくつがえすこと大海

の船を大風の時大波のくつがえすに似たり。大風吹いて草木をからし、飢饉も年々にゆき、疫病月々におこり、大旱魃ゆきて、河・池・田畠、皆かわきぬ。かくのごとく、三災七難、数十年起こって民半分に減じ、残りは、あるいは父母、あるいは兄弟、あるいは妻子にわかれて歎く声、秋の虫にことならず。家々のちりうすること、冬の草木の雪にせめられたるに似たり。これはいかなることぞと経論を引き見候えば、仏の言わく「法華経と申す経を謗じ、我を用いざる国あらば、かかることあるべし」と仏の記しお

かせ給いて候御言に、すこしもたがい候わず。

日蓮疑って云わく「日本には誰か法華経と釈迦仏をば謗ずべき」と疑う。また、「たまさか謗ずる者は少々ありとも、信ずる者こそ多くあるらめ」と存じ候。ここに、この日本国に人ごとに阿弥陀堂をつくり念仏を申すその根本を尋ぬれば、道綽禅師・善導和尚・法然上人と申す三人の言より出でて候。これは浄土宗の根本、今の諸人の御師なり。この三人の念仏を弘めさせ給いし時にのたまわく、「いまだ一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」

「捨閉閣抛」等云々。いうこころは、「阿弥陀仏をたのみ奉らん人は、一切の経、一切の仏、一切の神をすてて、ただ阿弥陀仏・南無阿弥陀仏と申すべし。その上、ことに法華経と釈迦仏を捨てまいらせよ」とすすめしかば、やすきままに、案もなくばらばらと付き候いぬ。一人付き始めしかば、万人皆付き候いぬ。万人付きしかば、上は国主、中は大臣、下は万民一人も残ることなし。さるほどに、この国、存の外に釈迦仏・法華経の御敵人となりぬ。

その故は、「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の

衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす」と説いて、この日本国の一切衆生のためには、釈迦仏は主なり師なり親なり。天神七代・地神五代・人王九十代の神と王とすら、なお釈迦仏の所従なり。いかにいわんや、その神と王との眷属等をや。今、日本国の大地・山河・大海・草木等は皆、釈尊の御財ぞかし。全く一分も薬師仏・阿弥陀仏等の他仏の物にはあらず。

また、日本国の天神・地神、九十余代の国主ならびに

万民・牛馬、生きと生ける生ある者は、皆、教主釈尊の一子なり。また日本国の天神・地神、諸王・万民等の、天地・水火・父母・主君・男女・妻子・黒白等を弁え給うは、皆、教主釈尊、御教えの師なり。全く薬師・阿弥陀等の御教えにはあらず。されば、この仏は、我らがためには、大地よりも厚く、虚空よりも広く、天よりも高き御恩ましますぶつぞかし。かかる仏なれば、王臣・万民ともに人ごとに、父母よりも重んじ、神よりもあがめ奉るべし。かくだにも候わば、いかなる大科有りとも、天も守護してよもすて

給わじ、地もいかり給うべからず。

しかるに、上一人より下万人に至るまで、阿弥陀堂を立て、阿弥陀仏を本尊ともてなす故に、天地の御いかりあるかと見え候。譬えば、この国の者が、漢土・高麗等の諸国の王に心よせなりとも、この国の王に背き候いなば、その身はたもちがたかるべし。今、日本国の一切衆生もかくのごとし。西方の国主・阿弥陀仏には心よせなれども、我が国主・釈迦仏に背き奉る故に、この国の守護神いかり給うかと、愚案に勘え候。しかるを、この国の人々、阿弥陀仏を、

あるいは金、あるいは銀、あるいは銅、あるいは木画等に志を尽くし財を尽くし仏事をなし、法華経と釈迦仏をば、あるいは墨画、あるいは木像にはくをひかず、あるいは草堂に造りなんどす。例せば、他人をば志を重ね、妻子をばもてなして、父母におろかなるがごとし。

また真言宗と申す宗は、上一人より下万民に至るまで、これを仰ぐこと日月のごとし。これを重んずること珍宝のごとし。この宗の義に云わく「大日経には法華経は二重三重の劣なり。釈迦仏は大日如来の眷属なり」なんど申す。

このことは弘法・慈覚・智証の仰せられし故に、今、四百余年に、叡山・東寺・園城、日本国の智人一同の義なり。

また禅宗と申す宗は、「真実の正法は教外別伝なり。法華経等の経々は教内なり。譬えば、月をさす指、渡りの後の船、彼岸に到ってなにかせん、月を見ては指は用事ならず」等云々。彼の人々、謗法ともおもわず、習い伝えたるままに存の外に申すなり。しかれども、この言は釈迦仏をあなずり、法華経を失い奉る因縁となりて、この国の人々皆一同に、五逆罪にすぎたる大罪を犯しながら、しか

も罪ともしらず。

この大科次第につもりて、人王八十二代隠岐法皇と申せし王ならびに佐渡院等は、我が相伝の家人にも及ばざりし相州鎌倉の義時と申せし人に代を取られさせ給いしのみならず、島々にはなたれて歎かせ給いしが、終には彼の島々にして隠れさせ給いぬ。神は悪霊となりて地獄に堕ち候いぬ。その召し仕われし大臣已下は、あるいは頭をはねられ、あるいは水火に入り、その妻子等は、あるいは思い死ににに死に、あるいは民の妻となりて今五十余年、その外の

子孫は民のごとし。これひとえに、真言と念仏等をもてなして法華経・釈迦仏の大怨敵となりし故に、天照太神・正八幡等の天神地祇、十方の三宝にすてられ奉って、現身には我が所従等にせめられ、後生には地獄に堕ち候いぬ。

しかるにまた、代東にうつりて年をふるままに、彼の国主を失いし真言宗等の人々、鎌倉に下り、相州の足下にくぐり入って、ようようにたばかる故に、本は上臈なればとて、すかされて鎌倉の諸堂の別当となせり。また念仏者

をば善知識とたのみて、大仏・長楽寺・極楽寺等とあがめ、禅宗をば寿福寺・建長寺等とあがめおく。隠岐法皇の果報の尽き給いし失より百千万億倍すぎたる大科、鎌倉に出来せり。

かかる大科ある故に、天照太神・正八幡等の天神地祇、釈迦・多宝・十方の諸仏、一同に大いにとがめさせ給う故に、隣国に聖人有って、万国の兵をあつめたる大王に仰せ付けて、日本国の王臣・万民を一同に罰せんとたくませ給うを、日蓮かねて経論をもって勘え候いしほどに、「これ

をありのままに申さば、国主もいかり、万民も用いざる上、念仏者・禅宗・律僧・真言師等、定めて忿りをなしてあだを存し、王臣等に讒奏して、我が身に大難おこりて、弟子乃至檀那までも少しも日蓮に心よせなる人あらば科になし、我が身もあやうく命にも及ばんずらん。いかが案もなく申し出だすべき」とやすらいしほどに、外典の賢人の中にも、世のほろぶべきことを知りながら申さぬは、諛臣とてへつらえる者、不知恩の人なり。されば、賢なりし竜逢・比干なんど申せし賢人は、頸をきられ胸をさかれしかども、

国の大事なることをば、はばからず申し候いき。仏法の中には、仏いましめて云わく「法華経のかたきを見て、世をはばかり恐れて申さずば、釈迦仏の御敵、いかなる智人・善人なりとも、必ず無間地獄に堕つべし。譬えば、父母を人の殺さんとせんを、子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする人のあらんを、臣下の身として、知りながら代をおそれて申さざらんがごとし」なんど禁められて候。されば、仏の御使いたりし提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭をはねられ、竺の道生は蘇

山へ流され、法道は面にかなやきをあてられき。これらは皆、仏法を重んじ、王法を恐れざりし故ぞかし。

されば、賢王の時は、仏法をつよく立つれば、王、両方を聞きあきらめて勝れ給う智者を師とせしかば、国も安穏なり。いわゆる、陳・隋の大王、桓武・嵯峨等は、天台智者大師を南北の学者に召し合わせ、最澄和尚を南都の十四人に対論せさせて、論じかち給いしかば、寺をたてて正法を弘通しき。大族王・優陀延王、武宗・欽宗、欽明・用明、あるいは鬼神・外道を崇重し、あるいは道士を帰依し、あ

るいは神を崇めし故に、釈迦仏の大怨敵となりて、身を亡ぼし、世も安穏ならず。その時は、聖人たりし僧侶、大難にあえり。今、日本国、すでに大謗法の国となりて他国にやぶらるべしと見えたり。

これを知りながら申さずば、たとい現在は安穏なりとも、後生には無間大城に堕つべし。後生を恐れて申すならば、流罪・死罪は一定なりと思い定めて、去ぬる文応の比、故最明寺入道殿に申し上げぬ。されども用い給うことなかりしかば、念仏者等、この由を聞いて上下の諸人をかたら

い、打ち殺さんとせしほどに、かなわざりしかば、長時武蔵守殿は極楽寺殿の御子なりし故に、親の御心を知って理不尽に伊豆国へ流し給いぬ。されば、極楽寺殿と長時と、彼の一門皆ほろぶるを各御覧あるべし。その後、いかほどもなくして召し返されて後、また経文のごとくいよいよ申しつよる。また去ぬる文永八年九月十二日に佐渡国へ流さる。日蓮、御勘気の時申せしがごとく、どしうちはじまりぬ。それを恐るるかの故に、また召し返されて候。しかれども、用いることなければ、万民もいよいよ悪心盛ん

なり。

たとい命を期として申したりとも、国主用いずば国やぶれんこと疑いなし。つみしらせて後用いずは我が失にはあらずと思って、去ぬる文永十一年五月十二日、相州鎌倉を出でて、六月十七日よりこの深山に居住して、門一町を出でず、既に五箇年をへたり。

本は房州の者にて候いしが、地頭・東条左衛門尉景信と申せしもの、極楽寺殿・藤次左衛門入道・一切の念仏者にかたらわれて、度々の問註ありて、結句は合戦起こって

候上、極楽寺殿の御方人、理をまげられしかば、東条の郡ふせがれて入ることなし。父母の墓を見ずして数年なり。また国主より御勘気二度なり。第二度は、外には遠流と聞こえしかども、内には頸を切るべしとて、鎌倉竜の口と申す処に、九月十二日の丑時に頸の座に引きすえられて候いき。いかがして候いけん、月のごとくにおわせし物、江の島より飛び出でて使いの頭へかかり候いしかば、使い恐斬おそれてきらず。とこうせしほどに子細どもあまたありて、その夜の頸はのがれぬ。また佐渡国にてきらんとせしほど

に、日蓮が申せしがごとく鎌倉にどしうち始まりぬ。使いはしり下って頸をきらず、結句はゆるされぬ。今はこの山に独りすみ候。

佐渡国にありし時は、里より遥かにへだたれる野と山との中間に、つかはらと申す御三昧所あり。かしこに一間四面の堂あり。そらはいたまあわず、四壁はやぶれたり。雨はそとのごとし、雪は内に積もる。仏はおわせず。筵・畳は一枚もなし。しかれども、我が根本より持ちまいらせて候教主釈尊を立てまいらせ、法華経を手ににぎり、蓑を

き、笠をさして居たりしかども、人もみえず、食もあたえずして四箇年なり。彼の蘇武が胡国にとめられて、十九年が間、蓑をき、雪を食としてありしがごとし。

今またこの山に五箇年あり。北は身延山と申して天にはしだて、南はたかとりと申して鶏足山のごとし。西はなないたがれと申して鉄門に似たり。東は天子がたけと申して富士の御山にたいしたり。四つの山は屏風のごとし。北に大河あり。早河と名づく。早きこと箭をいるがごとし。南に河あり。波木井河と名づく。大石を木の葉のごとく流す。

着 かさ 差 い 人 ひと 見 じき 食 じき 与 しかねん 留 じゅうくねん 彼 か 蘇武 そぶ 胡国 ここく あいだ 間 みの 蓑 ゆき 雪 じき 今 いま 山 やま 五箇年 ごかねん 北 きた 身延山 みのぶさん 天 てん 梯立 はしだて 南 みなみ 鷹取 たかとり 鶏足山 けいそくせん 西 にし 七面 もう 鉄門 てつもん 東 ひがし 天子 てんし 富士 ふじ 御山 みやま 屏風 びょうぶ 四 よっ 山 やま 北 きた 大河 たいが 早河 はやかわ 早 はや 箭 や 南 みなみ 河 かわ 波木井河 はきいかわ 大石 おおいし 木 こ 葉 は 流 なが

東には富士河、北より南へ流れたり。せんのほこをつくがごとし。内に滝あり。身延の滝と申す。白布を天より引くがごとし。この内に狭小の地あり。日蓮が庵室なり。深山なれば昼も日を見奉らず、夜も月を詠むることなし。峰にははこうの猿かまびすしく、谷には波の下る音、鼓を打つがごとし。地にはしかざれども大石多く、山には瓦礫より外には物もなし。国主はにくみ給う。万民はとぶらわず。冬は雪道を塞ぎ、夏は草おいしげり、鹿の遠音うらめしく、蟬の鳴く声かまびすし。訪う人なければ命もつぎがたし。

千鉾衝

はだえをかくす衣（膚隠ころも）も候（そうら）わざりつるに、かかる衣（ころも）をおくら（送）せ給（たま）えるこそ、いかにとも申（もう）すばかりなく候（そうら）え。

見（み）し人（ひと）、聞（き）きし人（ひと）だにもあわれとも申（もう）さず（哀）、年比（としごろ）なれし（慣）弟子（でし）、つかえし下人（げにん）だにも（仕）、皆（みな）にげ失（う）せとぶらわざるに（訪）、聞（き）きもせず見（み）もせぬ人（ひと）の御心（おんこころざし）、哀（あわ）れなり。ひとえにこれ、別（わか）れし我（わ）が父母（ふぼ）の生（う）まれかわらせ給（たま）いけるか（変）。十羅刹（じゅうらせつ）の人（ひと）の身（み）に入（い）りかわりて（替）思（おも）いよらせ給（たも）うか（寄）。

唐（とう）の代宗皇帝（だいそうこうてい）の代（よ）に、蓬子将軍（ほうししょうぐん）と申（もう）せし人（ひと）の御子（みこ）・李如暹将軍（りじょせんしょうぐん）と申（もう）せし人（ひと）、勅定（ちょくじょう）を蒙（こうむ）って北（きた）の胡地（こち）を責（せ）め

しほどに、我が勢数十万騎は打ち取られ、胡国に生け取られて、四十年漸くへしほどに、妻をかたらい、子をもうけたり。胡地の習い、生け取りをば皮の衣を服せ、毛帯をかけさせて候が、ただ正月一日ばかり唐の衣冠をゆるす。一年ごとに漢土を恋いて、肝をきり、涙をながす。しかるほどに唐の軍おこりて、唐の兵、胡地をせめし時、ひまをえて胡地の妻子をふりすててにげしかば、唐の兵は胡地のえびすとて捕らえて、頸をきらんとせしほどに、とこうして徳宗皇帝にまいらせてありしかば、いかに申せど

しじゅうねんようや　経　こち　ならい　ど　め　語　こ　儲　こくい　ど　わ　せいすうじゅうまんきうと　そうろう　しょうがつついたち　とういかん　許　けおび　掛　かわ　ころも　ふく　きも　切　なみだ　流　いちねん　かんど　こ　とういくさ　興　とつわもの　こち　攻　とき　隙　こち　さいし　振　捨　逃　とつわもの　こち　夷　と　くび　斬　とくそうこうてい　参　もう

も聞きもほどかせ給わずして、南の国、呉越と申す方へ流されぬ。李如暹歎いて云わく「進んでは涼原の本郷を見ることを得ず、退いては胡地の妻子に逢うことを得ず」云々。この心は、胡地の妻子をもすて、また唐の古き栖をも見ず、あらぬ国に流されたりと歎くなり。我が身には大忠ありしかども、かかる歎きあり。

日蓮もまたかくのごとし。日本国を助けばやと思う心によって申し出だすほどに、我が生まれし国をもせかれ、また流されし国をも離れぬ。すでにこの深山にこもりて候

が、彼の李如暹に似て候なり。ただし、本郷にも流され
し処にも妻子なければ、歎くことはよもあらじ。ただ、父母
のはかと、墓馴なれし人々のいかがなるらんとおぼつかなしと
も申すばかりなし。覚束

ただし、うれしきことは、武士の習い、君の御ために
宇治・勢多を渡し、前駆をかけなんどしてありし人は、たと
い身は死すれども、名を後代に挙げ候ぞかし。日蓮は
法華経のゆえに度々所をおわれ、戦をし、身に手をおい、
弟子等を殺され、両度まで遠流せられ、既に頸に及べり。

これひとえに法華経の御ためなり。法華経の中に仏説かせ給わく「我滅度して後、後の五百歳・二千二百余年すぎて、この経閻浮提に流布せん時、天魔、人の身に入りかわりて、この経を弘めさせじとて、たまたま信ずる者をば、あるいはのり、打ち、所をうつし、あるいはころしなんどすべし。その時、まずさきをしてあらん者は、三世十方の仏を供養する功徳を得べし。我また因位の難行苦行の功徳を譲るべし」と説かせ給う〈取意〉。

されば、過去の不軽菩薩は法華経を弘通し給いしに、

比丘・比丘尼等の智慧かしこく二百五十戒を持てる大僧ども集まりて、優婆塞・優婆夷をかたらいて、不軽菩薩をのり打ちせしかども、退転の心なく弘めさせ給いしかば、終には仏となり給う。昔の不軽菩薩は今の釈迦仏なり。それをそねみ打ちなんどせし大僧どもは、千劫阿鼻地獄に堕ちぬ。彼の人々は、観経・阿弥陀経等の数千の経、一切の仏名、弥陀念仏を申し、法華経を昼夜に読みしかども、実の法華経の行者をあだみしかば、法華経・念仏・戒等も助け給わず、千劫阿鼻地獄に堕ちぬ。彼の比丘等は、始めに

は不軽菩薩をあだみしかども、後には心をひるがえして、身を不軽菩薩に仕うること、やっこの主に随うがごとくありしかども、無間地獄をまぬかれず。

今また日蓮にあだをせさせ給う日本国の人々もかくのごとし。これは彼には似るべくもなし。彼は罵り打ちしかども、国主の流罪はなし。杖木・瓦石はありしかども、疵をかぼり、頸までには及ばず。これは悪口・杖木は二十余年が間ひまなし。疵をかぼり、流罪・頸に及ぶ。弟子等は、あるいは所領を召され、あるいはろうに入れ、あるいは

遠流し、あるいはその内を出だし、あるいは田畠を奪いなんどすること、夜打ち・強盗・海賊・山賊・謀叛等の者よりもはげしく行わる。これまたひとえに真言・念仏者・禅宗等の大僧等の訴えなり。されば、彼の人々の御失は大地よりも厚ければ、この大地は大風に大海に船を浮かぶるがごとく動転す。天は八万四千の星瞋りをなし、昼夜に天変ひまなし。その上、日月大いに変多し。

仏の滅後、既に二千二百二十七年になり候に、大族王が五天の寺をやき十六の大国の僧の頸を切り、武宗皇帝の

漢土の寺を失い仏像をくだき、日本国の守屋が釈迦仏の金銅の像を炭火をもってやき僧尼を打ちせめては還俗せさせし時も、これ程の彗星・大地震はいまだなし。彼には百千万倍過ぎて候大悪にてこそ候いぬれ。彼は、王一人の悪心、大臣以下は心より起こることなし。また権仏と権経との敵なり。僧も法華経の行者にはあらず。これは、一向に法華経の敵、王一人のみならず、一国の智人ならびに万民等の心より起これる大悪心なり。

譬えば、女人物をねためば、胸の内に大火もゆる故に、身

変じて赤く、身の毛さかさまにたち、五体ふるい、面に炎あがり、かおは朱をさしたるがごとし。眼まろになりて、ねこの眼のねずみをみるがごとし。手わななきて、かしわの葉を風の吹くに似たり。かたわらの人これを見れば、大鬼神に異ならず。日本国の国主・諸僧・比丘・比丘尼等もまたかくのごとし。たのむところの弥陀念仏をば日蓮が無間地獄の業と云うを聞き、真言は亡国の法と云うを聞き、持斎は天魔の所為と云うを聞いて、念珠をくりながら歯をくいちがえ、鈴をふるにくびおどりおり、戒を持ちながら

変(へん)じて赤(あか)く、身(み)の毛(け)さかさまにたち逆立(ごたい振)、五体(ごたい)ふるい、面(おもて)に炎(ほのお)あがり、かおは朱(しゅ)をさしたるがごとし。眼(まなこ)まろになりて丸(まなこ)、ねこの眼(まなこ)のねずみをみるがごとし。手(て)わななきて柏(て)、かしわの葉(は)を風(かぜ)の吹(ふ)くに似(に)たり。かたわらの人(ひと)これを見(み)れば、大鬼神(だいきじん)に異(こと)ならず。日本国(にほんこく)の国主(こくしゅ)・諸僧(しょそう)・比丘(びく)・比丘尼(びくにとう)等(ら)もまたかくのごとし。たのむところの弥陀念仏(みだねんぶつ)をば日蓮(にちれん)が無間地獄(むけんじごく)の業(ごう)と云(い)うを聞(き)き、真言(しんごん)は亡国(ぼうこく)の法(ほう)と云(い)うを聞(き)き、持斎(じさい)は天魔(てんま)の所為(しょい)と云(い)うを聞(き)いて、念珠(ねんじゅ)をくりながら歯(は)をくいちがえ(食違)、鈴(れい)をふるにくびおどり(振頸踊)おり、戒(かい)を持(たも)ちながら

悪心(あくしん)をいだく。極楽寺(ごくらくじ)の生(い)き仏(ぼとけ)の良観聖人(りょうかんしょうにん)、折(お)り紙(がみ)をささげ(捧)て上(かみ)へ訴(うった)え、建長寺(けんちょうじ)の道隆聖人(どうりゅうしょうにん)は輿(こし)に乗(の)って奉行人(ぶぎょうにん)にひざまず(跪)く。諸(もろもろ)の五百戒(ごひゃくかい)の尼御前等(あまごぜんとう)は、はく(帛)をつかいてて(使)んそう(伝奏)をなす。

これひとえに、法華経(ほけきょう)を読(よ)んでよまず、聞(き)いてきかず(聞)、善導(ぜんどう)・法然(ほうねん)が「千(せん)の中(なか)に一(ひと)りも無(な)し」と、弘法(こうぼう)・慈覚(じかく)・達磨(だるま)等(とう)の「皆(みな)これ戯論(けろん)」「教外(きょうげ)に別伝(べつでん)す」のあまきふる酒(さけ)にえわ(酔)せ給(たま)いて、さかぐるいにて(酒狂)おわするなり。

「法華(ほっけ)は最(もっと)も第一(だいいち)なり」の経文(きょうもん)を見(み)ながら、「大日経(だいにちきょう)は

法華経に勝れたり」「禅宗は最上の法なり」「律宗こそ貴けれ」「念仏こそ我らが分にはかないたれ」と申すは、酒に酔える人にあらずや。

星を見て月にすぐれたり、石を見て金にまされり、東を見て西と云い、天を地と申す物ぐるいを本として、月と金は星と石とには勝れたり、東は東、天は天なんど、ありのままに申す者をばあだませ給わば、勢の多きに付くべきか。ただ物ぐるいの多く集まれるなり。されば、これらを本とせし云うにかいなき男女の、皆地獄に堕ちんことこそ

哀
あわれに候え。

涅槃経には、仏説き給わく「末法に入って、法華経を謗じて地獄に堕つる者は大地微塵よりも多く、信じて仏になる者は爪上の土よりも少なし」と説かれたり。これをもって計らせ給うべし。日本国の諸人は爪上の土、日蓮一人は十方の微塵にて候べきか。しかるに、いかなる宿習におわすれば御衣をば送らせ給うぞ。爪上の土の数に入らんと思おぼすか。

また涅槃経に云わく「大地の上に針を立てて、大風の吹か

ん時大梵天より糸を下さんに、糸のはしすぐに下って針の穴に入ることはありとも、末代に法華経の行者にはあいがたし」。法華経に云わく「大海の底に亀あり。三千年に一度海上にあがる。栴檀の浮き木の穴にゆきあいてやすむべし。しかるに、この亀一目なるが、しかも僻目にて、西の物を東と見、東の物を西と見るなり」。末代悪世に生まれて、法華経ならびに南無妙法蓮華経の穴に身を入るる男女にたとえ給えり。

いかなる過去の縁にておわすれば、この人をとぶらわん

と思しめす御心はつかせ給いけるやらん。法華経を見まいらせ候えば、釈迦仏のその人の御身に入らせ給いて、かかる心はつくべしと説かれて候。譬えば、なにとも思わぬ人の酒をのみてえいぬれば、あらぬ心出で来り、「人に物をとらせばや」なんど思う心出で来る。これは、一生慳貪にして餓鬼道に堕つべきを、その人の酒の縁に菩薩の入りかわらせ給うなり。

濁水に珠を入れぬれば水すみ、月に向かいまいらせぬれば人の心あこがる。画にかける鬼には心なけれどもおそ

ろし。遊女描とわりを画にかけば、我が夫をばとらねどもそねま嫉し。錦褥のしとねに蛇織をおれるは服せんとも思わず。身の熱温あつきにあたたかなる風厭いとわし。人の心もかくのごとし。法華経の方へ御心をよせさせ給うは、女人の御身なれども、竜女が御身に入らせ給うか。

さてはまた、尾張次郎兵衛尉殿の御事。見参に入って候いし人なり。日蓮はこの法門を申し候えば、他人にはにず多くの人に見えて候えども、いとおしと申す人は千人に一人もありがたし。彼の人は、よも心よせには思われたら

じなれども、自体人がらにくげなるふりなくよろずの人に
なさけあらんと思いし人なれば、心の中はうけずこそおぼ
しつらめども、見参の時はいつわりおろかにてありし人な
り。また女房の信じたるよしありしかば、実とは思い候
わざりしかども、またいとう法華経に背くことはよもおわ
せじなれば、たのもしきへんも候。されども、法華経を失
う念仏ならびに念仏者を信じ、我が身も多分は念仏者にて
おわせしかば、後生はいかがとおぼつかなし。譬えば、国主
はみやづかえのねんごろなるには、恩のあるもあり、また

なきもあり。少しもおろかなること候えば、とがになること疑いなし。法華経もまたかくのごとし。いかに信ずるようなれども、法華経の御かたきにも、知れ知らざれ、まじわりぬれば、無間地獄は疑いなし。

これはさておき候いぬ。彼の女房の御歎き、いかがとおしはかるに、あわれなり。たとえば、ふじのはなのさかんなるが、松にかかりて思うこともなきに、松のにわかにたおれ、つたのかきにかかれるが、かきの破れたるがごとくにおぼすらん。内へ入れば主なし、やぶれたる家の、柱な

きがごとし。客人(きゃくじんきた)来れども、外(そと)に出(い)でてあいしらうべき人(ひと)もなし。夜(よ)のくらきにはねやすさまじく、はかをみれば墓見(はかみ)、しるしはあれども声(こえ)もきこえず。また思(おも)いやる、死出(しで)の山(やま)・三途(さんず)の河(かわ)をば誰(たれ)とか越(こ)え給(たも)うらん。ただ独(ひと)り歎(なげ)き給(たも)うらん。とどめおきし御前(ごぜん)たち、いかに我(われ)をば独(ひと)りやるらん、さはちぎらざりとや歎(なげ)かせ給(たも)うらん。かたがた、秋(あき)の夜(よ)のふけゆくままに、冬(ふゆ)の嵐(あらし)のおとずるる声(こえ)につけても、いよいよ御歎(おんなげ)き重(おも)り候(そうろう)らん。南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)、南無妙法蓮華経(なんみょうほうれんげきょう)。

弘安元年(こうあんがんねん) 戊寅(つちのえとら) 九月(くがつ) 六日(むいか)

日蓮(にちれん) 花押(かおう)

妙法尼御前御かたへ

みょうほうあまごぜんおん　方